



御堂筋の「和み」

絵・文 熱田親憲

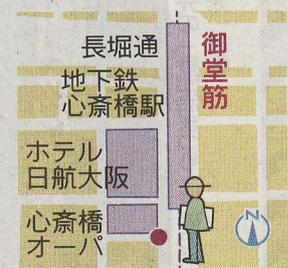
のすき間のちょっと広めの路地入り口で石柱を見かけた。「ゆ風呂小路、ゆ清水湯 徒歩百歩」と彫られ、案内に従った。路地前方にまぶしいばかりの茜色の夕日に迎えられ、藍色に染められた清水湯の暖簾をくぐると、酒屋、茶の湯などの営業に役立っていたと歴史家のお墨付きがあった。2階は受付・脱衣室、3階の浴室の案内に従ってエスカレーターに乗った。さぞかし料金は高いだろうと思ったら、入浴料390円、サウナ・ラドン別料金270円。街のど真ん中で、こんな低料金で大衆風呂を利用できるのをうれしく思う。浴室へエレベーターで移動すると、ゆったりスペースの五つの浴槽、サウナ室とラドン室が迎えてくれた。荷物を持参しているよそ者には、大きめのロッカーは助かった。

ウチの熱も、湯加減も柔かくて、思わず隣の客人に「和みますね」と声を掛けてしまった。くしくも当店の八田計三社長であった。やや温めのラドン室では「いい顔」をしているサラリーマン風の人と会話した。「仕事に余裕のある水曜日には毎週。気楽に来れますからね」と、本音をうかがったような気がした。

和める銭湯スタイルが一番

た。清水湯が立派なビルであるのに驚いた。1階には清水湯の由来が書かれてあった。旧町名が清水町とあるように、名水の地下水脈は大阪市内では清水町のみを流れていたという。この名水をくみ上げて、風呂に、午前5時半開店の早朝風呂サービスをしているという。24時間都市にふさわしい対応。気楽に利用できる「くつろぎ空間」に、八田社長の58年の「銭湯こだわり人生」を感じた。最近の「SPA」風温泉もいいが、本当のくつろぎを与えてくれるのは本来の入浴サービスに徹した銭湯スタイルかもしれない。名銭湯で歴史のあった「美草園温泉」が取り壊されると聞き、心は複雑である。

非常勤講師をしている関西国際大(兵庫県三木市)では、近くの「宝寿司」に食事によく行く。ご主人は、2階座敷で落語寄席を開いたりして、なかなかのアイデアマンだ。彼は、ミナミのすし屋を懐かしく思い出していた。彼にとって



転々としながら修業し、最後に落ち着いたのが「清水湯」近くに寮を持つ寿司屋だったという。仕事を終えて、ときには仕事前に清水湯に入り英気を養ったと当時を述べている。地下鉄御堂筋線心斎橋駅を降りて日航ホテル、OPA(オーパ)前を過ぎるとすべ、右側のビル